

親子教室における教育支援の実践と成果

A Report on Support for Elementary Education in Classes for Parents and Children

花園誠 (帝京科学大学), 木村龍平 (帝京科学大学), 大海由佳 (帝京科学大学), 古谷和子 (帝京科学大学),
榊原健太郎 (帝京科学大学), 馬場千秋 (帝京科学大学), 花園美樹 (元気っこくらぶ)
Makoto HANAZONO (Teikyo University of Science), Ryuhei KIMURA (Teikyo University of Science),
Yuka OUMI (Teikyo University of Science), Kazuko FURUTANI (Teikyo University of Science),
Kentaro SAKAKIBARA (Teikyo University of Science), Chiaki BABA (Teikyo University of Science),
Miki HANAZONO (Genkiko Club)

要約: 「親子科学教室」は, 平成 16 年から開催されている小学生・中学生, 及びその保護者を対象としたイベントである。富士北麓北都留教育事務所の担当者により起案され, 学生の発案により学園祭的なイベントに発展させた。平成 25 年度からは「親子教室」と改名, 理科にこだわらない幅広い内容のイベントとして実施されている。担当教員にとって, 初等教科教育法の授業で活用できる教材や指導法を開発するよい機会となっている。本資料では, 平成 27 年度のイベントで実施された講座のうち, 平成 25 年度からの特徴である理科以外の講座より, 英語, 音楽, 道德の実施内容について学習指導略案の形式で掲載した。

I. 「親子科学教室」の経緯

1. 「親子科学教室」の起案

平成 16 年 8 月 7 日, アニマルサイエンス学科が開設されて 3 年目 (※平成 13 年はバイオサイエンス学科の 1 コース), 第 1 回日の「明日の風『夏休み親子科学教室』」が開催された。起案は「富士北麓・東部教育事務所」の当時の「地域教育推進担当」であった。この部署は, 公立小中学校の管理職相当であり (この部署退任後には概ね小もしくは中学校校長として着任), 担当者は小学校等の義務教育がかかえる問題に詳しい。当時の起案文より趣旨と目的を抜粋する。以下の通りである。担当者の思いがにじむ起案文であるのでそのままに紹介する。

北都留地区に存立する大学の中には理科学的な専門分野・領域において, 特色ある研究と人材育成教育を進めている大学があります。大学は, 現在の科学の進歩を切り開きつつ, 大学周辺の地域の人々の要求をも汲み取りつつ, とともに「地域環境を考える」提起をしたり, 「科学を学ぶ面白さと大学の役割」を発信していただいております。

そんな, 構想の一環として, 地域の小学生・中学生, 及びその保護者を対象として, 「夏休み『親子科学教室』」を計画しようとしております。これは, 地域の人々や諸団体の連携の力で子ども達の健

全な成長を願い活動してきた, 北都留地域教育推進連絡協議会「明日の風」との共同事業であり, 会の参加構成団体となった大学独自のとりくみでもあるわけです。

そして, 「小学生・中学生, 及びその保護者を対象として, 『科学を学ぶ面白さ』を発信するため」の内容として

- ・「興味を持ち, 意欲的に参加できるテーマ」であること。
- ・「より体験的で, 自らつくり, さわり, 操作し, 確かめ合うことができるもの」であること。
- ・「小学生・中学生, 及びその保護者が分かるように簡単なことばかけと語りかけ」であること。
- ・「援助者 (個別なサポート) がいて適切なアドバイスがあり達成感がえられるもの」であること。

当時の担当者は, 上野原町 (当時) 内の小学校と中学校を対象にアンケートを実施し, 大前提である「興味を持ち, 意欲的に参加できるテーマ」として, キーワード「ロボット」・「CG」・「動物」・「環境問題」を導き出した。そして「自立型ロボットでサッカーをしよう」・「ロボットを作ってみよう」・「燃料電池を作ってみよう」・「環境問題で私たちができること」・「犬のしつけとトレーニング」・「昆虫のいろいろ, その生態と」の 6 テーマを起案, 本学に企画を持ちかけた。専門性の合

致する教員数名と討議,その中から「実践可能なこと」としてA講座「ロボットづくり」(担当:メディア情報システム学科)とB講座「犬のしつけと動物の行動」(同:アニマルサイエンス学科)の2講座が企画された。

2. 第1期「親子科学教室」の展開

当時の本学は,新設のアニマルサイエンス学科を中核とした活発な課外活動の展開により校風が刷新されようとしていた。

B講座担当のアニマルサイエンス学科教員は,「犬のしつけと動物の行動」の具現化に向けてアニマルサイエンス学科系9団体(動物園研究・ドッグトレーナー研究・動物介在活動・馬術・牧場研究・コンパニオンアニマルセンター・猫の目・野生生物研究・ビオトープ研究)の代表者連合である「動物介在教育研究会」と会議を重ねた。

当時の動物介在教育研究会の代表学生は,アニマルサイエンス学科のアクティビティを十分に発揮させるため,「ちょっと先走ったミニ学園祭」をコンセプトにして,本館棟の2階3階の全教室を使用した企画「アニマル・さいえんす!?『動物も人間も・・・仲間!』」を発案した。そして100名余の学生を動員,当初予定の1講座を「ペットの環境エンリッチメント」・「マウスの行動実験」(動物園研究)/「犬との交流」・「犬のクッキー作り」(担当:ドッグトレーナー研究)/「AIBOロボ登場」(担当:動物介在活動)/「乗馬疑似体験」(馬術)と発展させた。今日に至る「親子教室」の原型誕生である。

II. 第2期「親子科学教室」から「親子教室」へ

平成25年,地域連携推進室長の発案で「親子科学教室」から「科学」の2文字を外し,「親子教室」へと看板を掛け替えた。理工系の単科大学としてスタートした本学であったが,今や3学部11学科と拡充。所属する教員の専門も多様化した。「『科学』の2文字を外したほうが,異分野の教員も参加し易くなる。その方が講座も充実する。」との意図があった。

早速,総合教育センターより2名の教員が参加した。人文科学系の講座が企画され,これまでの理科系一色から脱却した。平成27年度(第12回)には6講座にとさらに拡充,内容は質・実ともに格段に充実した。

III. 今年度の実践と成果

平成27年7月26日,「親子科学教室」時代か

ら数えると第12回目となる「親子教室」が開催された。こども学部が創設されて8年が経過し,講座を担当する教員の全員が教員養成に関わっていることもあってか,講座の内容は初等教科教育法の開発と実践の色合いが強い。

これ以降,その実践内容を「学習指導略案」の書式で紹介する。

1. 講座名「手づくり楽器をつくろう」(道徳の指導法)

小学校「道徳」では,「総合的な学習の時間」による横断的・総合的な学習や探究的な学習を通じた児童の道徳性の育成という目標がある。そうした総合的な学習における道徳性の育成の指導法の一つとしてこの講座を位置づけ,元はアフリカの楽器で黒人奴隷によってアメリカにもたらされたカズー(Kazoo)という膜鳴楽器とウォッシュボード(Washboard)というリズム楽器の制作と合奏を通じて,音と楽器の手づくり制作を媒介とした伸びやかな感性表現の共感的理解の場と身の回りのモノや環境を見つめ直す心を育む機会を提供する。

a. 主題

手づくり楽器を作り,作り上げた楽器を使った合奏を楽しむ。

b. ねらい

身の回りにある廃品(ペットボトル,ゴムホースなど)で制作できる楽器を作り,周囲の人やモノや環境との関係を見つめ直す心を育む。

c. 本時の展開(表1)

手づくり楽器を実際に使用してデモンストラーション演奏を行うことや廃品の特性に関心を喚起させる助言を通して,児童が学習への動機づけや学習活動全体のイメージを得やすい様に促しながら授業を展開する。

d. 結果と考察

参加者同士(小～中学生,保護者)が制作を助け合いまた互いのデザインを取り入れるなど,和気藹々とした雰囲気講座となった。比較的簡単に制作でき,かつ演奏のための練習時間をほとんど要しない楽器であったためでもあるだろう。今後は,楽器の由来に触れることを通じた歴史的理解にも光を当てたい。

2. 講座名「音楽を楽しもう」(初等教科教育法(音楽))

初等教育の音楽科目では,音楽表現と幅広い音楽活動を通して,音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むことが大切である。「音楽を楽しもう」(初等教科教育法(音楽))講座では,音楽

活動の基礎的な能力を伸ばし豊かな情操を養うために、子ども一人ひとりの創意工夫を生かした個性的な学習活動を実施した。

a. 主題

小学校低学年の音楽活動に視点をおいて、「歌う」「音楽とともに体を動かす」「楽器を演奏する」「音楽のイメージに合わせた作品を作る」など実践的な音楽活動を行った。

b. ねらい

音楽に対する興味、関心、意欲を引き出し、親子による「共通の音楽経験」を得ることが目標であった。親子で音楽の楽しさ、美しさ、躍動感などを体験できるようにプログラムを構成した。鍵盤楽器を多用して講座を展開するために、指導助手古谷和子と協力して実施した。

c. 本時の展開（表2）

プログラムの導入では、音楽的な関心を引き出すために「挨拶」と「名前確認」を応答歌でおこなった。活動の展開では、音楽の三要素である「リズム」「音の高低」「和声」を段階的に理解し、体験していった。活動の最後には、三要素を総合して歌と合奏の「音楽表現」を行なった。まとめは、参加した親子が音楽でひとつになり、楽しめる「音楽鑑賞」とした。

d. 結果と考察

上野原市の夏休み「親子教室」の講師を初めて体験した。このため、プログラムを多めに用意し、子どもの様子や音楽的反応をみながらプログラムを選び活動を進めた。対象が小学校低学年であったので、楽譜を使用しないでも可能な音楽活動となるようにした。低学年児童は、歌声を聴くと一緒に歌い出したり、演奏を聴くと思わず体を動かし踊ったりする。このような自然と表現された動きを大切に、簡単な遊びやリズムでつながりながらプログラムを進行した。来年度の「親子教室」では、初等教育の楽器の種類を増やし、子どもの演奏の可能性を広げたい。

3. 講座名「カリグラフィーでカードを作ろう」（外国語活動の指導法）

小学校「外国語活動」では、コミュニケーション能力の素地を養うため、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることを目標としている。音声面を中心とした活動を行うため、アルファベットなどの文字や単語は、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションの補助となるように指導しなくてはならない。文字を書かせる場合も、既習語を厳選する必要がある。本講座では、アルファベットを知ると同時に、

音声では馴染のある単語と文字を融合させること、さらには欧米の文化を知ることを主眼としている。

a. 主題

英語のアルファベットを知り、カリグラフィーでメッセージカードを作成する。

b. ねらい

メッセージカード作成を通じて、英語のアルファベットの大文字・小文字の違いを認識させ、聞きなれた英単語のつづりと文字を融合させる。

c. 本時の展開（表3）

表2に実際の講座の流れを示す。文字は「音声の補助」ということを意識し、音と文字（単語）を一致させ、視覚に訴えるよう提示を心がけている。上級学年においては、英単語とローマ字の違いにも意識を向けさせるようにしている。

d. 結果と考察

アルファベットを導入し、日本語との文字体系の違いを意識させることは比較的容易であったが、カリグラフィー用のマーカーを用いてカードにメッセージを書いていくときに、楽しい反面、難しさを感じる参加者も存在した。だが、プレゼント用としてカードを作成するなど、文字を知る動機づけになった。

4. 講座名「ディズニーソングを英語で歌おう」（外国語活動の指導法）

「外国語活動」では、音声に慣れ親しませるため、歌を用いた指導がよく行われている。歌を用いることで、英語特有のリズムに触れ、自然に英語らしい音を身につけることができる。本講座では、英語の歌の中でも大人から子どもまで、楽しみながら英語の音声に慣れることを目的としている。

a. 主題

ディズニーソングを通じて、英語の音声に慣れ親しむ。

b. ねらい

英語の歌を歌いながら、音のかたまりとして英語の音に慣れる。

c. 本時の展開（表4）

講座では、英語の発音規則のうち、音の連結や省略などを紹介し、発音練習を通じて、音の一つのかたまりとして認識させ、英語らしい発音を身につけることを主眼としている。

d. 結果と考察

今回は Mickey Mouse March, It's a small world, Let it Go の3曲を扱ったが、テンポの速い曲の場合、なかなか口が回らないこともあり、英語初学者であればあるほど、ハードルが高くな

る。児童の感想の中には、「知っている歌を英語で歌うことができたので楽しかった。」というものもあったが、より楽しませるためには、子どもたちに「英語の歌を全部歌えた」という達成感を与え、「もっと英語で歌いたい」という気持ちにさせることが必要不可欠である。選曲についても、子どもたちも知っている曲にしたいという希望から、ディズニーを扱ったが、少し難しすぎる選曲であったことは否めない。「外国語活動」でも扱っている子ども向けの歌をたくさん取り上げ、身体を動かしながら、歌を覚えさせていくなど、今後、運営を行っていく際の課題が浮かび上がってきたので、来年度以降の実施の際、改善をしていく必要がある。

IV. まとめ

「親子科学教室」が「親子教室」と装いを新たに3年が経過した。変わらないのは、そこに常に「親の目」があることである。すなわち、本実践では、「子どもにも」そして「大人にも」満足されるような教育実践が求められている。教育は発達段階に応じて、あるいは理解度・習熟度に応じてカリキュラム化されているのが普通であることを考えると、万人受けする教育内容は、永

遠にたどり着くことがない課題であるのかもしれない。しかし、それ故に、挑戦しつづける価値があると考えている。来年度以降、さらに異分野の教員の参加を促し、より一層の「親子教室」の拡充を目指したい。

V. 謝辞

本教室の実現に際しましては、地域連携推進室の歴代担当者、そして上野原事務職員より多岐にわたるご支援をいただきました。この紙上を借りて厚く御礼申し上げます。また、地域への広報および参加者の取りまとめに際しましては、歴代の「富士北麓・東部教育事務所」の職員の皆様より多大なるご尽力を賜りました。心からの感謝を申し上げます。そして、本実践の全ては、本学学生の献身がなくては、とうてい実現不可能でした。延べ1,000人は超すであろう学生の皆様の真摯な取り組みに心からの敬意と感謝を申し上げます。皆様、どうもありがとうございました。

表1. 本時の展開「手づくり楽器を作ろう」

過程	指導内容	学習活動	指導形態	支援・留意点	評価基準・観点
導入5分	動機づけ	・指導者が手づくり楽器の完成品サンプルを使ってデモンストレーション演奏(デモ演奏)をする。 ・楽器の由来を知る。	グループ	具体的に手づくり楽器の音を提示し、どんな音が出ているか、あるいはどんな風に見えるか、聞こえるかを意識させる。	聴こえた音を、自分なりの言葉やリズムを通して表すことができる。
展開35分	予想・計画	様々な形状の完成品サンプルに触れ、各自が作りたい楽器のイメージ図をスケッチしつつ、どんな音が出るか予想し合う。	グループ	持ち寄った生活雑貨や廃品の形・大きさ・手触りを確かめて、その特徴や特性を生かすように助言する。	作りたい楽器のイメージ図をスケッチしつつ、音色を予想できる。
	活動	指導者が提示する制作工程に合わせて、各自がオリジナルな手づくり楽器を完成させる。	グループ	素材の違いや切込みを入れた穴の大きさなどによって、音色を調整できる面白さに気づかせる。	好きな音色を見つけることができる。
	仕上げ	楽器を使ってPOPソングなどを合奏する。	グループ	色んな音が交ざる面白さや楽器の個性を楽しむ。	手づくりの音を楽しめたか。
まとめ5分	考察	制作と合奏の過程を振り返る。	グループ	うまく出来たことや難しかったことなどを探す。	「音」への関心が広がったか。

表2. .本時の展開「音楽を楽しもう」

過程	指導内容	学習活動	指導形態	支援・留意点	評価基準・観点
導入 10分	動機づけ	ご挨拶, 名前確認 応答歌	個人	ラーソーラの簡単なメロディーで子どもの名を呼ぶ。子どもは同じ音程のラーソーラを「はあい」と歌い応える。	音楽的な点呼と簡単な聴音。
展開 60分	活動	リトミック ダンス 工作と唱歌 ハンドベル	グループ グループ 個別とグループ グループ	「さんぼ」「かたつむり」等子どもが慣れ親しんでいる曲目で stop-go-stop-かたつむり(ゆっくり)を演奏する。これに合わせて、親子で四分音符と2分音符や高音低音を表現する。 「白くまジェンカ」の曲に合わせて、いろいろな楽器を演奏する。円陣になるー自由に動くー1列になるーみんなでアンサンブルなどの動きを組み合わせていく。 とんぼのめがねの歌詞を考えながらとんぼのめがねを制作する。そのメガネをかけて親子で「とんぼのめがね」を歌う。 「きらきら星」をハンドベルで演奏する。ひとり1音のハンドベルを担当し、1曲を全員の団結力で演奏していく。	音符の長さ、音の高低、曲の緩急により音楽活動を行う。 初等教育で使用 する楽器を用いた活動。 歌詞に思いを寄せて、歌う意義を考える。 合奏の楽しさと他の人の音を聞く大切さを学ぶ。
まとめ 15分	振り返り	音楽鑑賞 感想	グループ 個人とグループ	「トレパック」を聴き、音楽に合わせてジャンプする。最後に音楽を聴く。 指導者と参加した親子全員で感想を述べた。帰る前に、一人ひとりと握手をして、来年の再会を約束した。	会場が音楽でひとつになるように心がける。

表 3. 本時の展開「カリグラフィーでカードを作ろう」

過程	指導内容	学習活動	指導形態	支援・留意点	評価基準・観点
ウォームアップ 5分	動機づけ	指導者が作成したメッセージカードを提示する。	グループ	メッセージとして使えるものをいくつか紹介し、文字の練習に入りやすくする。	伝えたいメッセージを考える。
展開 35分	導入	カリグラフィーのイタリック体とローマンキャピタル体のお手本を提示し、書き順や書き方の注意をする。	個人	低学年はアルファベットに触れるのが初めてなので、日本語と異なった文字体系を意識させる。中学年はローマ字から英単語への橋渡しとなるよう意識させる。高学年は既習語の音と文字を融合させる。	日本語と英語の文字体系の違いと特徴を見つけさせる。
	活動	それぞれが書きたい言葉を書く練習をする。	個人	書き方指導を行う。希望者には個別にお手本を提供する。	書き順を意識して書けるか。
	仕上げ	文字練習後、カードに清書し、飾りをつける。	個人	クラフトパンチを使った飾り例を提示する。	メッセージに合った飾りか。
まとめ 5分	振り返り	参加者全員の作品を見ながら、アルファベットのおさらいをする。	グループ	日本語の文字体系との違いを認識させる。	文字体系の違いは何かを復習する。

表 4. 本時の展開「ディズニーソングを英語で歌おう」

過程	指導内容	学習活動	指導形態	支援・留意点	評価基準・観点
ウォームアップ 10分	動機づけ	英語の発音規則のうち、音の連結や省略など、音声変化の特徴について提示する。	グループ	具体的に歌詞の一部を例として、発音してもらい、英語の音を意識させる。	正しく発音することができるか。
展開 30分	導入	課題曲を聞き、音とリズムに慣れる。	グループ	音の変化に注意しつつ、英語の音のかたまりとして、発音する。	リズムに乗ることができるか。
	活動	フレーズごとに歌い、英語の音とリズムに慣れる。	グループ	歌にくいところは、ゆっくり、そして補助をしながら進める。	変化した音を発音できるか。
	仕上げ	曲全体を歌う。	グループ	楽しみながら、全体を歌う。	大きな声で楽しく歌えたか。
まとめ 5分	振り返り	日本語との音の違いを意識して発音できたかを振り返る。	グループ	最も楽しく歌えた歌を再度、おさらいする。	英語でも歌えるという自信を持てたか。